

文芸

俳句

とりたての茄子きしみ合ふ籠の中
池田 逸子

どの坂を行くも十葉巨古刹
伊藤 敬子

夏祭り無言のエール送る母
今関満喜子

水溜り映る青葉と傘の色
魚地 照子

天と地と軸はずれたかこの酷暑
川島 通則

骨董の昔語りや半夏生
向後 寛

待ち侘びし妹が朗報梅雨晴れる
越川せつ子

傾けし一献句座の梅雨の宿
越川 義則

膝詰の議論のゆくえ夏座敷
小松 藤男

雲の峰銚電風車風の中
佐瀬 輝夫

洗ひ流さむ沖縄の白雨かな
椎名万里子

手の音に並びくる鯉梅雨の池
市東富美江

逆上がりしているような胡瓜かな
鈴木とし子

ひまわりや循環バスに客一人
鈴木 利子

鯛や子等は家路に山下る
玉虫 栗扇

梅雨空や媪蹟く水溜まり
土屋美枝子

炎昼やペットボトルも空になり
土屋 義昭

鯛の鳴けば父母恋しかり
戸村 静華

新緑や立付けわるき雨戸あけ
早川 勇

狩り尽くさん喰ひ尽くさんとさくらんぼ
藤田 雅夫

短歌

赤子連れ帰りくる娘に見せたきと
夏の花多に植ゑこむ
西山満里子

朝顔のらせんになりたる蔓の手の
先は伸び伸び宙を吹かれり
椎名美枝子

先端の縊りを正してもう一度
針穴通すはいとも難し
押尾 輝子

細やかな小物も顔も生き生きと
江戸の面影和紙人形は
加瀬 弘子

川端の合歡の梢を彩りて
薄紅色に花の咲きたり
水須 俊

「あさいち」にオクラのレンジ映さるる
乾かすとふ手だてのあるを学びぬ
青木 秀子

久びさの朝の散歩の畦道に
緑色せる風が吹きつ
鈴木まさ子

水代はりに食べよと友は畑より
西瓜を採りて吾にくれたり
田崎 尚美

小骨多き鯛の身ほぐし鯛飯を
炊きてくれたり勤めもつ娘は
芹川 初子

人住まぬ吾家に咲ける振花と
女孫が多に持ち来てくれぬ
斉藤つね子

畑打つて野菜育てて茄子きゆうり
今年のスイカ甘味上上
内藤 くに

吾一代元号三たび替りたる
有事天災心はなれず
伊藤 定男

到来の茶菓を愛でつつ老二人
新茶の香りとともに楽しむ
高梨 キヨ

アトリエにシャンソンの声響き来て
パリの路地裏思い浮かべり
浅野 榮子

多めなる中性脂肪を告げられぬ
この頃出でしお腹を見やる
八角 三枝

作品展

◎町民会館ミニギャラリー

9月 水墨画クラブ
10月 涼風生花クラブ

◎文化会館ロビー展

9月 横芝写真クラブ
10月 アートクレイクラブ

◎サビア展

9月 短歌会
10月 アート押し花クラブ

◎銚子商工信用組合展

9月 絵手紙ひかりの詩
10月 華舟会

こうほう
博物館 78

珍しい石仏

小川台隆台寺を訪れたときのことであるが、山門をくぐって左側を見ると、苔むした変わった石仏を目にした。像は50cmほどの背丈で、よく見ると像の下の四角い台座の正面に、「宝曆六(一七五六)年二月吉日、十九夜講中、村中善男善女」と彫られてあり、十九夜塔であることがわかった。

以前にも一度紹介したことがあるが、十九夜塔といえ、町内にも多数存在し、その多くは長方形の石に、如意輪観音坐像を浮き彫りにしたものである。如意輪観音という仏様は、通常は座って片肘で頬杖

をついている姿で表わされている。しかし、この隆台寺の十九夜塔の如意輪観音様は、立ち姿で丸彫りである。頬杖を付く右手の一部はすでに欠けているが、頬には掌が残っていて、如意輪観音様とわかる。

町内には多くの石仏があるが、こうした珍しい像容の石仏も大事にしていきたいものである。

(社会文化課 道澤 明)



▲小川台隆台寺の十九夜塔